

はそこにいわば要約されており、それらを理解し判断するためには、従来用いられてきたとは別の方法を用いることが必要となる。つまりこうした概念ができたのは何によるのかを知るためには、われわれの意識すなわち、われわれの外部を眺めることが大切である。とりも直さずそれは歴史を観察することなのである⁸¹⁾と結論するのである。従って上述した同時的統合化と通時的統合化の中後者が優先するのである。

「宗教生活」ではそれで最後の知識の合目的性と客観性に関する論述で終わっている。知識の社会学的考察においてデュルケームが範疇における社会のもつ重要性を強調したのは集合的悟性が社会の統合に役立つからなのであり、また時間や空間、原因、数などについて同質的考え方がなければ、人々の知性間に一致は存在せず、共同生活が不可能となるからなのである。だから社会は範疇を個々人の恣意に委ねることは自からを放棄することなしにできない。だから社会が生活できるためには十分な道徳的順応だけでなく、論理的な順応が存在することが必要となるのである。こうしてデュルケームは知識社会学の最後を知識の社会学的理論で飾っているのである。社会により知識の社会的構成のもつ意義は次の三つの点にある。その一つは個人的なものである経験に基づく経験主義に根拠を与えること。二つは聖性が個人的経験とは異なるという点で先験主義 (apriorisme) にも正当性を認めたことであり、三つは集合的悟性による範疇の練成と社会の集合的経験に準拠すことを要請していることである。そして知識の社会学的理論は経験主義と先験主義を折衷させたのである⁸²⁾。しかしこの社会学的聖性論が真理の慣例的、協定的特性なものになるのではという諸問題はどうか解決されるのであろうか。集合的悟性によって練成された範疇ははたして真理に到達できるのであろうか。われわれはこの点についてデュルケームが「宗教生活」の中で社会もまた自然の一部であるとのべていることを想起すべき

である。「もし範疇が社会の状態を起源的には表出しているだけであるとすると、それは自然に対しては拡大して適用されなくなるのではないか。こうして範疇が自然界を考えるのに役立つ限り、それは実際には役立つが現実とは関係のない人為的用具的シンボルとしての価値はもたなくなりはないか、という問題が生じる。⁸³⁾

しかしそう解することは知識の社会学理論は社会がたとえ特殊な現実であるにせよ、自然の一部であることを忘れさせるものであるとデュルケームはいう。社会は自然の最も複雑な部分なのであると答える⁸⁴⁾。ところで事物の間の基本的関係は領域によって根本的に変るものであることはできない。そのことは同じ理由によって社会においても異なることはできない。社会は事物間の関係をより明白に表示するのである。それ故に社会的事物に則って練成された概念が自然の領域の事物を考えるのに役立つのである。これらの観念が最初の意味から曲げられるとシンボルの役割を演ずることになる。シンボルといっても十分基礎のあるものなのである。そしてこれらは構成された概念であるということからそこに人為が介入するのだが、その人為は自然に近く、またそれに限りなく接近している。例えば、時間、空間、類などの概念は社会的要素という人為の介入によって構成されるが、それだからといって客観的価値を欠くものではない⁸⁵⁾。むしろ反対にそれが社会的起源をもつことによって自然の特質にも基盤をもつことになるのである。デュルケームの知識の社会学的理論はこうしたものであって、認識論的な構成物にとり換わることはできない。社会が自然の最高の形態であり、最高に発達したものはすでに要素的なものの中に存在していると主張することはまったく形而上学的思索であり経験的な知識社会学とは縁のないものとなる。

デュルケームは「宗教生活」の中ですべての人間の信仰心にとって唯一の権威は集合的意識であるとのべているが、科学の権威もこの集合意識か

81) デュルケーム「宗教生活」p. 27-28

82) G. Namer, *op. cit.*, p. 69

83) 「宗教生活」p. 625

84) G. Namer, *op. cit.*, p. 70

85) *Op. cit.*, p. 71